

愛知 図書館協会々報

ご挨拶



会長 大塚 英二

このたびはからずも愛知図書館協会会長の役をお引き受けすることとなりました。前任の森先生には長く支えていただき、ありがとうございます。先生の跡を襲うのは至難の業ですが、皆さまの教を乞いながら任務を果たしていく所存ですので、どうかよろしく願いいたします。

私はもともと歴史学（江戸時代の社会史）の教育研究者で、一昨年まで県立大学におりました。それゆえ、図書館との関係では文献調査や学生指導等の面で大変お世話になりました。また、二年ほど図書館長（正確には学術情報センター長）の職にあったものですから、大学図書館という限定付きですが、少しは図書館業務については知っているつもりです。しかし、実際の運営面ではほとんど素人に近いでしょう。大学の図書館長などというものは、だいたい館運営は職員さんに任せて、学内の各種委員会にひたすら顔を出すというのが、大方の仕事となっているからです。

一方で、学生の図書館利用、とりわけ文献検索とレポート作成への活用などについて、職員さんがやさしく一生懸命取り組んでいる姿には感銘を受けた記憶があります。司書定数がどんどん削減され、非正規が大半になるという状況、かつ情報処理技術の急速な進展によりサービス内容が大きく変化するなかでも、県立大ではしっかりした対応がとられていたのだと改めて感じています。

以上のようなつながりはあったにせよ、小生程度の者が当職を引き受けるにはいささか気が引けました。しかし、これまでほぼ利用者側に立って見てきたことで、逆にそれを生かして図書館の仲間は何らかの提案や発信することも可能であろうと、少し開き直って当職につかせて頂きました。ご教導をお願いいたします。

さて、社会や地域が図書館に期待することもずいぶん変わってきました。市町には多目的利用施設内に置かれた図書館も見られ、それこそ図書館自体の役割も多様化しています。もともと図書館は展示施設ではありませんが、必要に応じてミニ展示を行うようになりました。住民の知的関心を満足させ、新たな興味を呼び起こす、地域における生涯教育チームの一つの装置として機能することが求められているのでしょうか。

他方、図書館は利用者の自宅や職場とつながり、図書・資料情報を与えるネットコミュニティの構成者となっています。それは巨大な図書館群を背景に持ち、思いもよらないデータの束を提示してくれます。地域という単位をはるかに超えるグローバル世界とのかかわりです。図書館は旧来の業務以外に、以上のような新たなコンテンツを併せ持った存在として位置づけられていくのでしょうか。

そのうえで、次のようなことも考えてしまいます。私たちの日常生活では情報のやり取りにおいてペーパーレスの比重が大きくなるのは仕方ないとしても、図書館には現物の紙の絶対的な力を最後まで死守してほしいという願望です。紙の持つ質感、印刷物としての香り、ネット情報の基底にあってその裏付けとなる膨大な質量の存在、それらと直接・間接にアクセスできる躯体が図書館だという矜持です。

何か一方的な思いを綴ってしまいましたが、最後に喫緊の課題である防災対応にかかわることについて述べます。今年も大きな地震から始まりました。地震や水害への備えの重要性はいうまでもありません。そこで、気になっていることがあります。多くの図書館では、貴重書等を保管する書庫を地下ないし低層階に置いているのではないのでしょうか（特に大学図書館）。しかし、近年の災害では低いところに水や土砂が流入して起こる被害が顕著です。水を遮断するのが最善でしょうが、今後、低層階からの図書・資料群の移動など、意識して取り組む必要が出てくるのではないのでしょうか。

課題は多いですが、自身としても学んで力をつけていく所存ですので、どうぞよろしくお願いいたします。

ご挨拶



森 正夫

ふと気がつくと、90歳までちょうどあと2年になっていた。私が会長の職務をお引き受けしたのは2004年の秋、およそ20年前であり、それなりに高齢であったが、今はとんでもない老生になっており、そのことへの自覚の鈍さには恥ずかしい想いを抱く。

幸い、昨春から澆漑たる大塚英二先生が愛知県下の図書館活動を広く見渡す素晴らしい視野をもって会長に就任されており、すでに大きな成果を挙げておられるので、深い感銘を受けている。

私が就任する少し前、NHKのクローズアップ現代において、インターネットで読む電子図書の台頭が取り上げられていた。

また、図書館の検索・貸出業務の電子システム化は、すでに1970年代から着手され、普及しており、図書・資料そのものの電子媒体化も1990年代から様々な形態で進んでいた。ただ、そうした出版文化の形態の変化に拘わらず、在来の活字形態による図書の刊行は衰えを見せず、高度な学術書の刊行はむしろ発展している。

たとえば、近年の集英社による『アジア人物史』全12巻の刊行など、かつて見られなかった刺激をもたらしてくれるシリーズをはじめ、眼を見張るばかりの出版は後を絶たない。そうした状況を見ると、図書と出版文化のもつ創造性は無限であり、人類の持つエネルギーのたくましさには、改めて驚かされる。

もとより、愛知県の図書館活動には現在も今後も多様な課題に直面するであろうが、基本には図書と出版文化が固有に持つ創造性が存在することを忘れてはならないと考える。愛知図書館協会が大塚英二先生のご指導の下、着実に発展することを心より祈念している。



2023.5.17 令和5年度 総会にて

図書館振興事業 図書館講演会「古典籍の宝庫あいち」

令和5（2023）年11月27日（月）「あいち県民の日」の連携イベントとして、愛知県図書館と共催で「古典籍の宝庫あいち」と題し、図書館講演会を愛知県図書館大会議室で開催した。森正夫氏と大塚英二氏による講演の後、質疑応答を行った。なお、この講演会は、多くの方が参加できるよう、オンラインでの同時配信も行った。各講演の概要をご紹介します。

愛知県内図書館等が所蔵する 漢籍資料について

森正夫

1 徳川美術館平成27年展示：「徳川家康一天下人の遺産」及び令和5年展示：「徳川家康一天下人への歩み」より

初めに平成27年に徳川美術館で開催された特別展「徳川家康一天下人の遺産」と令和5年に開催された特別展「徳川家康一天下人への歩み」に基づいてご紹介する。

徳川家康は関ヶ原の戦いで反対勢力たる豊臣政権を制し、征夷大將軍となった。「大御所」として駿府城に移り住んだ後、大坂の陣で豊臣家を滅ぼし、徳川家による国家統治を確立した。家康の死後、遺産の一部は九男義直、十男頼宣、十一男頼房の御三家に分け与えられ、蔵書は江戸城や御三家に分配された。

九男義直の尾張家には「駿河御譲本」として伝わり、約2,900冊が現在確認されている。家康は学問に対する造詣も深く、「駿河御譲本」は儒教教典類・歴史書・佛書・諸子百家の書・漢詩文集など分野は多岐にわたり、唐本や朝鮮本などの輸入本を多く含むことが特徴である。蔵書類は尾張家の「御文庫」に江戸時代を通じて保管され、尾張家初代義直の学問や尾張の教学に多大な影響を与えた。明治維新時に流出した蔵書はあるものの、そのほとんどが尾張家十九代義親が昭和10年に創設した「蓬左文庫」に引き継がれ、昭和25年以降は名古屋市が同文庫の管理運営を引継いでいる。

蓬左文庫にある貴重な書籍の中から、『太平聖恵方』と『斉民要術』の2冊を紹介する。

『太平聖恵方』は、中国北宋時代の太平興国5年（980年）に、太宗の命により編纂された代表的な医療百科全書である。各種の病気の症状・治療法・薬の調合法などが体系的に記されている。太宗自ら序を付し、淳化3年（992年）に刊行された。蓬左文庫の

ものは、南宋時代の紹興年間（1131年-1162年）に再度発行された重刻本で、北条貞顕によって日本に持って来られた。家康のもとにもたらされた時には、すでに半数が失われており、家康は欠落部分を補って全巻を整えた。

もう一つの『斉民要術』は、6世紀頃に成立した中国最古の農業に関わる本である。「斉民」は庶民（主に農民）、「要術」は生活に必要な技術の意味で、穀類・野菜・果実など農作物の栽培法、酒類・味噌・麺類の製法、家畜の飼育法などを体系的に記している。文永11年（1274年）にこの写本が完成したことを、北条実時が巻末に記している。古い写本としては唯一のものであるほか、料紙は北条氏関係の書状の裏面が使用されており、鎌倉時代の根本史料となっている。

2 徳川美術館平成17年展示：「絵画でつづる源氏物語―描き継がれた源氏絵の系譜」より

平成17年に徳川美術館で開催された特別展「絵画でつづる源氏物語―描き継がれた源氏絵の系譜」から紹介する。

蓬左文庫の重要文化財の1つは『源氏物語 河内本』であり、徳川美術館には国宝の「源氏物語絵巻」がある。紫式部によって著された『源氏物語』は、物語成立からあまり間をおかずして、絵画化されたと考えられている。『源氏物語』を描いた絵画は「源氏絵」と呼ばれ、各時代を通じて描き継がれてきた。また、土佐や狩野、住吉といった各画派に関わる史料には、源氏絵が絵師達の間で必須のレパートリーであり、さまざまに描き継がれていたことが記されている。各帖を収めた冊子の表紙や挿図には、代表的な場面が絵画化され、物語の順を追って描いていく絵巻も製作され、金雲で区切った中に五十四帖全てを描いた屏風は、長編物語を一望に見渡すことができる。

3 徳川美術館・蓬左文庫開館80周年記念 平成27年展示：「豊かなる朝鮮王朝の文化 —交流の遺産」より

蓬左文庫で平成27年に開催された特別展「豊かなる朝鮮王朝の文化—交流の遺産」より紹介する。

朝鮮半島では早くから金属活字を使用し、高品質な料紙を用いて多くの書物を印刷してきた。蓬左文庫では中国明王朝の制度を説明した大明會典、上古から唐朝までの制度を整理した通典など、儒学や中国の古典、朝鮮の歴史書について世界有数のコレクションを持つ。

16世紀末に朝鮮の活字本が日本に渡り、活字印刷が試みられる。家康は銅活字を作り、「駿河版」と呼ばれる金属活字の印刷を実現した。この時代には豊臣秀頼や京都の豪商である角倉素庵なども活字版を刊行し、これらの活字本が「古活字本」と総称されている。また、徳川家康は朝鮮王朝との関係修復に尽力し、慶長12年（1607年）に朝鮮からの使節が訪日し、その後も文化8年（1811年）まで朝鮮通信使がたびたび来日した。通信使は朝鮮国王の国書を持ち、江戸に向かう途中で各藩の儒学者や文人に漢詩文や書画が贈られ、交流が深まった。

また、江戸時代の祭礼では「唐人」と呼ばれる異国風の装束をまとった練り物が登場し、初めは南蛮風だったが、朝鮮通信使の来日により通信使のイメージが反映され、「唐人」の姿にも通信使の特徴が投影されるようになった。これによって祭りの中で朝鮮通信使の姿が取り入れられた。

4 名古屋市鶴舞中央図書館所蔵の漢籍資料の紹介

名古屋市鶴舞中央図書館には、佐藤文庫・深山文庫などの漢籍資料を中心とした優れた文庫がある。

◆佐藤文庫

尾張藩の漢学者である佐藤牧山（楚材）によるもので、純漢籍、和漢籍の版本が中心であるが、写本もあり、国書もある。年代は幕末から明治末期にわたる。佐藤牧山の数多くの研究対象のうち、『魏叔子文集』、『帰震川文集』、『近思録』、『資治通鑑』、『清朝史略』、『朝鮮史』は注目されるが、特に中国の『魏叔子文集』と『帰震川文集』を取り上げる。

『魏叔子文集』…清代初期の文学者の魏叔子による文集。作者の魏叔子は、名を禧、字は冰叔、江西省寧都

県の人。兄の際瑞、弟の礼とともに「寧都の三魏」と称された。科挙受験のためだけの学問に反対して古学を志し、特に史学に詳しく、史論にも優れていた。明滅亡後、故郷に隠棲して子弟を教育し、江南を旅して明の遺民と交わりを結んだ。清の康熙帝に召されたが、受けなかった。議論を主とした雄健な文章を作り、清初の代表的散文家であったとされる。

『帰震川文集』…明代の文学者の帰震川による散文集。作者の帰震川は、名を帰有光、字は熙甫、江南蘇州府崑山縣の人。60歳にして始めて登第し、選ばれて湖州長興（県知事）となった。死後、明の文人王世貞は、帰震川の古文を韓愈・欧陽脩を継ぐものとして評価した。

◆深山文庫

漢籍、漢籍の和刻本、和書、版本、写本、活字本、雑誌など、出版地も年代もバラバラであり、状態は余りよくないものの、非常にバリエーションに富んでおり、貴重な書物も少なからず含まれている。『明儒学案』、『本草綱目』、『海寧王忠毅公遺集』、『隨園三十六種』、『劉文成公集』などが注目されるが、『明儒学案』と『本草綱目』を紹介したい。

『明儒学案』…清代初期の思想家である黄宗羲の主著。康熙15年（1676年）に完成した明代の全62巻の儒学史である。明代思想史の基本文献として利用され、学派の区分も、この書を基礎にすることが多い。

『本草綱目』…明代の医師である李時珍によって編集された全52巻にわたる本草書で、万暦23年（1596年）に出版された。字数は190万字、薬となる品目約1,900種を分類し、産地・形状・処方などが記されている。薬草を分類・集成した薬学百科全書であるが、薬草以外の植物百科としても貴重な情報を伝えている。



県内重要文庫の歴史と文化財指定への動き
—図書・読書と地域社会—

大塚英二

1 文庫とはどういうものか、**地域の図書館として機能した豪農らの蔵書**

一般的に文庫とは、収集者により図書が集められ、まとめられ、そこに名称が付与され形成される。文庫には個人によるもの、藩校などの機関によるもの、講と呼ばれる結社的な仲間同士によるものなど、各種の類型がある。名称がつくような文庫という形でなくとも、歴史学では「蔵書の家」と呼ばれる資料を多く持つ家もあり、それらが地域に対して図書館のような社会的な役割も果たしていた。

旧稲武町の豪農で、後に地域行政の担い手にもなった古橋家は、経済的な結びつきを背景に、名古屋は勿論、京都・大坂・江戸の三都とも文化的なネットワークを形成し、書物を収集していた。地域の人々が必要な時にその蔵書を参照させ、知識と教養を提供する「蔵書の家」として、古橋家の活動は地域の文化にかかわっていた。江戸時代の終わりごろには、足助の事例であるが、村芝居を催す近隣の若者組連中から狂言台本「一の谷ふた葉軍記」と「熊谷物語の稽古本」の借用を願われた記録がある。

そもそも書物が高価であったこともあり、庶民はこれを借り出して写しを作ることが多い一方で、豪農の家では本屋とやり取りし、版本を入手していた。現在の弥富市の荷之上村の豪農である、服部家の書物についての研究では、同家が名古屋の本屋と取引していたことが明らかになっている。服部家ではその蔵書を内容ごとに分類しており、文庫とはなっていないものの、文庫や図書館のような整理がなされていた。

そして、こうした地域の豪農には、それを束ねる知識人がいた。代表例としては、豊田市の金剛寺というお寺のお坊さんで、大鈞海門禅師という方がいる。この人は、地域の20を超える村に教え子がおり、こういった人を頂点とした教育文化のネットワークが作られていたと考えられ、その基礎になったのが「蔵書の家」ではないか。

2 三文庫の歴史と文化財化への動き

続いて県内の重要文庫について説明するが、先の森先生のお話にあった蓬左文庫の説明は省略し、三河の三大文庫である村上文庫、岩瀬文庫、羽田八幡宮文庫

について述べる。

刈谷の村上文庫は、医師・国学者として著名な刈谷藩士、村上忠順が中心となって村上家で購入あるいは筆写し、千巻舎（ちまきのや）にて所蔵されていた古文書・典籍類が中心となっている。この所蔵書籍群は、大正3年9月に刈谷町の宍戸俊治（医師・町会議員、宍戸家は刈谷藩の藩医仲間、藩士仲間）と藤井清七（町会議員）の二人が数千円を投じて購入され、新たに建築した図書閲覧室と書庫を合わせて、当時の刈谷町に寄贈した。この書物を近世文芸史家かつ書誌学者として著名な森銑三（せんぞう）氏が分類・整理して文庫の体裁となる。この文庫を中心に、刈谷町立図書館として大正4年11月に創立し、同6年7月に開館したのが現在の刈谷市中央図書館の始まりである。村上忠順が学者として優れていたためか、昭和33年には「典籍村上文庫」として刈谷市文化財に指定されていた。

西尾市の岩瀬文庫は、肥料商であり西尾町長を務めた岩瀬弥助氏が設立した私立図書館。彼は社会に還元し、地域文化の向上に貢献したいという思いから、全国の書店や古書店から8万冊余りの書籍を収集し、書庫を作った。名古屋大学の塩村耕氏により全面的な書誌データベースが作成され、本文庫の学術的全容が明らかとなっている。

岩瀬文庫は、多岐にわたる分野の資料を網羅し、岩瀬氏と司書の高木氏によって目録整理が行われた後明治41年に文庫・私立図書館として開館し、愛知県職員の西原吉治郎氏の設計によって書庫が建設された。この書庫はレンガ造りで、その美しさから国の登録有形文化財として認定されている。

岩瀬氏が亡くなった後、昭和30年に西尾市が蔵書10万冊を購入し、土地と書庫の寄贈を受け、西尾市立図書館岩瀬文庫として設立された。その後、隣接地に昭和42年にできた郷土館の隣に西尾市立図書館が新たに建設され、岩瀬文庫は図書館としての役割を終えた。平成11年には岩瀬文庫書庫が国の登録有形文化財になった後に博物館施設として西尾市岩瀬文庫が開館し、平成19年には博物館として登録されるなど、歴史的な価値を持つ文化財として認知され、その役割を果たしている。

羽田八幡宮文庫は令和2年に市の文化財指定となり、豊橋市中央図書館蔵の図書だけでなく、八幡宮や

神明社の歴史資料も含めて指定され、県の文化財指定に向けた動きが進んでいる。嘉永元年（1848年）に吉田宿町の町人の福谷藤左衛門、八幡宮神主の羽田野敬雄、お菓子商人の佐野蓬宇らによって設立された。文庫創立の際、全国の有志に寄贈を呼びかけ、水戸藩主徳川斉昭や吉田藩主松平信古、国学者平田鉄胤らから図書が寄贈された。慶応3年（1867年）には蔵書が1万巻を超える規模に成長したとされる。羽田八幡宮文庫は書籍収蔵庫、閲覧所（松陰学舎）、講義室（誦習学舎）を備えた総合的な学習施設として位置づけられ、書籍の管理・保管が合理的に行われた。貸出用の箱に「他郷の人は庇の下で見せるだけ」などの文書が残っており、出納方式による閲覧体制と貸出方式を確立した近代図書館の先駆けとされている。また、学者を招いて講座の開催や飢饉の対策本の提供等を行い、社会事業としても展開していたことが特筆される。

その後羽田野敬雄の死後、文庫は一時衰退し、蔵書は一部散逸したが、豊橋市が市立図書館を目指し羽田八幡宮文庫の旧蔵書9,272巻を買い取った。市立図書館は明治45年に創立し、翌大正2年に開館。これは県内市立図書館としては岡崎町立通俗図書館に次ぐものであり、日本各地で図書館開設の波が起きていた時期に開館した。

3 文化財としての文庫の未来は

文化財保護法の改訂において、最も重要な変更点は、文化財をまちづくりに生かすことが強調され、これが非常に重要な方針となったこと。また、学識経験者、商工会、観光団体などが協議会を構成し、地方公共団体の長が文化財の管理を担当するようになった。新たな方針では、文化財の利活用を積極的に推進し、教養・研究・教育の分野以外においても、「観光」や街づくりといった広い意味での利活用が重視されており、観光や集客にも貢献する可能性が広がる。

豊橋市は羽田八幡宮文庫の活用・公開方針を積極的に進めており、文化観光の目玉として育てる可能性を見出している。このような仕事を中心的に進めるために、中央図書館に学芸員を採用し、図書館司書だけでなく学芸員を配置することで、国の文化財を文化観光に活用する方向性を行政として採用している。

豊橋市が県の指定文化財にかけていく動きが、文化観光という新たな定義づけによる問題提起を受けた動きとなっており、この流れが地域の文庫や博物館にも

影響を与えつつある。

次に刈谷市・西尾市の文庫の活用について。あくまでも個人的な勝手な物言いをご容赦いただきたい。刈谷市では既に市の指定を受けている村上文庫について、県指定文化財化を目指す方向が一つの課題といえる。現在、村上文庫は文化財としては複雑な状態であり、豊田市と連携してその活動全体が理解できるような形に整備されると良い。

西尾市の岩瀬文庫は既に様々な企画を展開しており、ユニークな展示が行われている。将来的には新たな博物館法の改正に向き合い、新しいレベルでの展示を作っていくことを期待したい。

4 おわりに

これまで、「蔵書の家」から図書館につながる流れを概観してきたが、京都大学名誉教授の横田冬彦氏（『日本近世書物文化史の研究』、岩波書店、2018）や米沢短期大学の小林文雄氏（東北大学『歴史』76、1991）などの研究がきっかけとなっている。横田氏らの研究は、近世後期における「蔵書の家」の社会的機能に焦点を当て、地域に知識を伝える役割やヘゲモニー（まとめる力）の概念を提示している。

一方で、中子裕子氏の論文「無足人（有力者）の読書と文芸」では閉鎖性も存在することを指摘している。

中京大学の小川和也氏によれば、横田氏は「村の中に庄屋/村人などの階層があるのも事実。社会的な「知」の階層差によって、村落共同体が成り立っている」とし、「蔵書の家」は単に平等性や階層性で切られるものでなく、地域秩序の構成という形で統一的に理解されるとしている。

愛知県史の編纂に携わった青木美智男氏も、同じようなことを述べているが、出版文化についての次のような指摘が興味深い。源氏物語は中世に書かれたものであるが、江戸時代に書物が広がり、文化の大衆化が進み、近世に広まったといえる。その意味では近世文学かも。日本の文化の原型は出版からできているのではないかも。

文化財を持つ図書館も多い、指定されていなくても文化の資源として持つということなので利活用を行政として考えていく必要があると思う。

新館紹介

江南市立図書館 移転オープン

江南市立図書館 館長 山本崇喜

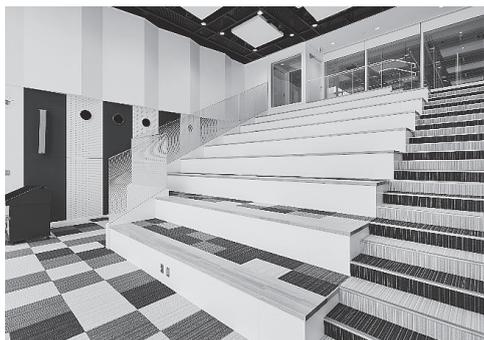
■江南市民が待ち望んだ新図書館が誕生。

2023年4月1日、江南市立図書館は、名鉄犬山線布袋駅前に誕生したtoko⁺toko⁼labo（江南市布袋駅東複合公共施設）の3階・4階に移転オープンした。延床面積は旧館の約3.5倍となる3484.72m²。2023年9月末時点の本館の蔵書冊数は168,641冊で今後、収蔵可能冊数30万冊に向けた整備をしていく。また、移転に伴い全ての蔵書にICタグを貼付。これにより図書資料の貸出・返却手続、予約した資料の取り出しを利用者自身で行うことが可能となった。

**■学習室、イベントホールなどの施設も充実。**

図書館の4階には102席のブース型個人学習席や、仕事や調査・研究に利用できるコワーキングブースを完備。これらは座席予約システムで管理しており、事前にWebから予約することもできる。

また、3・4階に階段状に客席を配置した定員88名のイベントホールも備えている。こちらのホールは防音となっているため楽器を使ったイベントも開催しているが、イベントを行わない時には閲覧席として開放している。館内で利用できるボードゲームも取り揃えているため、ボードゲームを楽しむ人の姿も見られる。

**高浜市やきものの里かわら美術館・図書館へリニューアルオープン**

高浜市やきものの里かわら美術館・図書館 加藤佐弥香

■高浜の人とまちが育つ つながりの森

「高浜市公共施設総合管理計画」の一端として、図書館機能を既存の2つの施設に複合化した。

2023年4月、美術館と図書館機能を複合化した「高浜市やきものの里かわら美術館・図書館」となり、同年7月22日に旧かわら美術館である「かわら美術館・図書館(本館)」2階と、福祉・教育などの行政窓口のある高浜市いきいき広場の2階・3階に新たな図書スペースが移転オープン。各施設の特色との相乗効果を目指している。

■高浜市やきものの里かわら美術館・図書館（本館）

展覧会スペースと同フロアに設置した「ライブラリー ほんの森」では、一般図書を中心に、美術や郷土に関する図書、児童書などをコンパクトに配している。企画展とタイアップした特集や雑誌架を使用した「特集小箱」など、特色のある特集を展開している。

■いきいき広場図書・情報スペース「としょぴあ」

2階一般図書コーナーは、「旅」「暮らし」「ビジネス」「医療」のテーマ毎に配架。学習コーナーを利用する学生向けにティーンズコーナーも設けている。

一般図書コーナーと別に学習コーナーがあり、席数は30席、フリーWi-Fiを設置。参考書や辞書類を配架し、学びの場として学生など多くの人利用している。

3階の「こどもと暮らしの本コーナー」は、カーペット敷きの部屋で、絵本や児童書、子育てや料理の本を配架し、ゆったり本を楽しめる場となっている。読み聞かせなどのイベントも実施している。

PICKUP

児童サービス研修（拡大講座）

「本の力・子どもの底力

— 本で子どもの成長を応援しよう」

2023/6/22

愛知図書館協会では、4年ぶりに児童サービス研修（連続講座）のうち、1つの講義を広く受講生を募集する拡大講座として愛知県図書館大会議室で開催した。

今年度は「本の力・子どもの底力 — 本で子どもの成長を応援しよう」として絵本専門士養成講座講師の尾野三千代氏をお招きして開催した。図書館職員のほか、図書館で活動するボランティアからも108名の参加があり、尾野先生の豊かなご経験に基づいた、子どもの本や子どもたちの持つ力への信頼の気持ちがあふれるあたたかいお話に大変盛況な会となった。

そもそも絵本とはどういったものか、絵本のWriterとAuthorの違いのご説明をいただいた後、子どもとはどういった特性があるのかといった原点を振り返った上で、子どもにとって本がどんな役割を果たすべきか、子どもの生き方、育ち方に寄りそい、応援する物語がどんな本なのか、実際の絵本の例を示してご説明いただいた。

また、子どもに本を手渡す際の1つの方法として「なぞり読み」によるストーリーテリングの実演をしていただき、研修後のアンケートでは「早速実践してみたい」といった声もあった。

最後に質疑応答があり、会場から出た質問にお答えいただき講演会は幕を閉じた。



愛知図書館協会 会勢

(2024年2月1日現在)

施設会員		93
	公共図書館	67
	専門図書館	4
	大学図書館	20
	その他	2
個人会員		69
賛助会員		9
	計	171

事務局日誌 (2023年3月～2024年2月)

R5/3/2	情報セキュリティ研修（愛知県図書館 以下県図）
4/11	令和4年度会計監査（県図）
5/17	令和5年度総会
5/17	第1回理事会（県図）
6/8	第1回研修委員会（ウェブ会議）
6/22	児童サービス研修（拡大講座）（県図） 愛知県公立図書館長協議会と共催
6/22	児童サービス研修①（県図）
7/7	児童サービス研修②（県図）
9/5	児童サービス研修 （ステップアップ：子どもの本の紹介文の書き方）開始 （通信講座として開催：～12月上旬まで） 講義日 12/22（県図）
9/8	児童サービス研修③（県図）
9/27	レファレンスサービス研修：拡大講座①（県図）
10/6	レファレンスサービス研修（演習）開始 （通信講座として開催：～12月上旬まで） オンライン講義：11/29、12/1
10/26	児童サービス研修④（県図）
10/27	レファレンスサービス研修：拡大講座②（県図）
11/27	図書館講演会「古典籍の宝庫あいち」（県図） 愛知県図書館と共催
R6/1/19	拡大講座「発達障害への理解」（県図）
1/25	児童サービス研修実行委員会（県図）
2/2	資料保存研修（県図）
2/21	第2回研修委員会（ウェブ会議）